
魔法世界と高校生

藤枝夏彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法世界と高校生

【Nコード】

N4099Z

【作者名】

藤枝夏彦

【あらすじ】

2030年

現代の魔法はかなり手軽なものになり誰でも使用出来るようになった。

初

最初に

「魔法」

魔法とは呪文を唱えたりして行うが、この世界では違う。

魔法を使用するには魔法結晶石まほうけつしよせきが必要となる。

魔法結晶石とは魔力が込められた結晶石である。

人間は誰でも魔力を所持している。だが魔力を所持しているだけでは魔法は使用は出来ないのである。

魔法を使用するにはおのれ自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきで変換する必要があるのだ。

けれど魔法結晶石も無限で使える訳でも無い。例えるなら拳銃と
かと同じで弾数が無くなると使用出来なくなるのである。

使用出来なくなった「魔法結晶石まほうけつしよせき」は専門のショップに持っていき
補充する必要がある。

補充するにはショップへ行き己自身の魔力を魔法結晶石まほうけつしよせきに変換す
れば再び使用する事が出来る。

魔法結晶石を使用した魔法にも種類があり主に火水風雷土光の6種
類と補助魔法に分けられる。

基本攻撃系魔法は6種類の中の1種類しか使えないが補助魔法は別
で誰でも気軽に使用する事が
できる。

今、この世界には4つの魔法高校が存在する。

ヨーロッパ、ロシア、アメリカ、日本の4校である。

このいずれかの高校を卒業すると国家公務員クラスの待遇を受ける
事が出来るので毎年何万人もの
受験生がいるのである。

これがこの世界における魔法である。

「4月15日」

日本魔法騎士学校これが今日から俺が通う魔法高校。 といつても1週間前が入学式なのであるが手続きの問題上入学式には出れず、今日が初登校になる。

なのだが完全に寝坊してしまい急いで学校に向かっている途中である。

「やばい！やばい！完全に遅刻コースだ！」

「俺ちゃんと目覚ましかけたはずなのに・・・」

髪の色は漆黒の黒、髪の長さはやや長めで目にかかる位、制服を少し着崩して着ている

「志木野春樹しきの はるき」

は通学路を走りながら自分の制服のポケットに入っていた携帯を確認すると

「電源入ってねえじゃねーかよ！」

と一人で叫び

「参ったな、入学式に出れなかったし、今日が初登校になるのに初日から遅刻かよ」

つと春樹は最初こそは急いで走っていたが走るにつれ確実にペースが落ちていた。

「はぁ、はぁ、はぁー」

春樹は息を切らしながら

「あーだめだキツイ諦めるか。」

つと完全に走ることを諦め歩き出し

（体力落ちたなゝゝ運動不足かな。ここの学校受かる為に勉強ばっかしてたしな。）

とか

（この学校どんだけ広いんだよ）

っと思いつながら春樹は学校への道を歩いていた。

ちなみにこの学校の広さは半径10キロにも及ぶ広大な学校である。

この敷地内に学生寮

があるのだが校舎は中央にあり学生寮は東の端にある。 一応自転車通学も可能であるが

春樹は持つていないので徒歩になる。

（8時15分かゝ えーと確かHRは8時半だったよな。 まだここからだと20分位掛かるな）

と思いつながら通学路を歩いていると、自分と同じように歩いている女生徒がいた。

（俺と一緒に遅刻組みかなゝ）

っとか心の中で思いつながら歩いていると前を歩いていた女生徒がいきなり立ち止まりすぐ傍にあった桜を眺めだした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・綺麗」

っとその生徒は小さく呟いた。 後ろを歩いていた春樹は

「綺麗つてもう桜の花も大分散つてるぜ」

っと春樹はその女生徒に話しかけていた。

「えっ？」

と言いつ少し驚いた女生徒はこちらを振り返った。 その女生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子と言う言葉が凄く似合う少女であった。

「あ、いやゴメン」

っと春樹は

（あれ？なんで俺今話しかけたんだろ。）

「うんうんいいの確かに桜もかなり散っちゃてるし・・・」

「でも私つて桜観たのつて初めてなの。」

っと女生徒は少し寂しそうな顔で答えた。

「いいの？このままじゃと授業に間に合わないよ」

つと女生徒が春樹に話しかけてきた。

「おつとそうだそうだ」

さすがにこれ以上遅刻はヤバイと思った春樹は

「じゃあ俺先行くわ。」

「君はいいの？」

春樹はそう女生徒に「尋ねると

「うん。私はもうちよつと桜を観てから行くから。」

「わかった。じゃ先に行くわ。」

といい別れ際に

「あ、俺志木野春樹ていうんだ学校で会ったらよろしくな。」

つと女生徒に言う

「うん。よろしく私は冬野雪^{ふゆのゆき}」

つと彼女が答えてくれたので春樹は手を振って別れた。

8時45分

春樹はどうにか学校にたどり着き下駄箱で上靴に履き替えて春樹は廊下を歩いていった。まだ廊下

には生徒が何人かいておそらくHRが終わったばかりなのであろう。その中で春樹は

（えゝつと職員室だよなつてえ職員室で何処だよ。くそお学校の中も広すぎだ。）

つと思ひ広い校内を歩いていると

「おおいい！！」

と後ろから怒号をいわれ振り返ると

「おい！お前1年だろ！なんでこっちの校舎歩いていやがる！」

と金髪ピアスの男がこちらに歩み寄ってきた。近くにいた女生徒達は口々に

「やばいよ。あの子」
や

「1年生だからこのルール知らないのかな？」

「私、先生呼んでくる。」

などと、周りにいた女生徒達はちょっとしたパニックになっていた。

春樹は

（初日から最悪だ！まさか絡まれるとは・・・俺的には目立ちたくないんだが・・・）

つとか考えているとその金髪ピアスの男子生徒が春樹の前まで来て

「おい！聞いてんのか！」

つと怒号を飛ばしてくる。春樹はこれ以上絡まれても面倒なので

「はい、聞いています」

つと答え

「すいません。今日から初登校なんで職員室を探していたら間違えてこっちの校舎に入ってしまったんです。」

春樹が素直に謝ると金髪の男子生徒は

「ちっ」

と舌打ちをして

「職員室は向こうの校舎だ。さっさと行け」

と金髪男子生徒に言われた春樹は「ペッコ」

と1度頭を下げその場を後にした。

初（後書き）

初小説になります。

初登校そして出会い2

春樹は金髪ピアス男子生徒にいわれた校舎に行くとすぐに職員室が見つかり、春樹は

「あつここか」

「コンコン」

と2回職員室の扉をノックし

「失礼します」

つといい春樹は職員室の中に入っていた。

職員室の中はまるで図書館のようで魔道書や参考書などが積み上げられ本当

に職員室か？と思う程である。春樹はすぐ傍にいたの男性教諭に

「あのゝすみません」

つと声をかけ

「今日からここの学校でお世話になります。志木野春樹しきのはるきです。」

つと男性教諭に挨拶すると

「ああ1年生の子かあちよつと待って」

角刈りでいかにも体育教師丸出しな男性教諭が大きな声で

「二条先生、二条先生、先生の所の生徒がやつと着ましたよ」

と呼ぶと奥の本の山の方から

「はい今行きます。」

つと奥の本の山から淡い栗色の茶色の髪で腰くらいまでの長さの髪でかなり童顔身長も春樹よりかなり低くまるで同い年の同級生みたいな女性出てきて

「あゝ君が志木野春樹君ね。ようこそ魔法騎士高校へ。あたしは君の担任の二条未来にじょうみらいよろしくね。科目は魔法学ね

つてか来るの遅いよ志木野君もうHR終わっちゃてるからね。」
つ少し怒り気味で春樹に近づき

「志木野君次遅刻したらぶん殴るよ」

満面の笑みで拳を握り怖い事を言ってきた。

（教師が生徒をぶん殴るって。 いいのかよ・・・）

春樹が苦笑しながらそんな事を考えていると

「じゃあ1限目あたしの授業だからその時にクラスの皆に紹介するね あつ志木野君の

クラスは1 - 4だから」

「あつ、ちなみにランクはFね。」

と担任の二条が笑いながら言ってきたので

春樹はコクンと頷き

「はい、わかりました。」

と答えた。

「じゃあちよつとあたし授業の準備してるからそこでちよつと待っててね。」

といいまた担任の二条は本の山へ消えていった。

（Fランクねえ・・・まあ俺の今の状態だったらFランクがいい所だよ・・・

まあその方がいいか目立たなくて・・・色々と・・・）

春樹は「くすつと」誰にも気づかれなくらいの笑みを浮かべた。

その場で待たされ待つ事5分程で担任の二条未来が片手に教科書も持って現れ

「いやぁお待たせお待たせじゃあ志木野君教室行こっか」

つと二条がいい

「あつ、はい」

と春樹は答えた。

教室に向かう途中で春樹は二条に

「そういえば先生は魔法ランクはいくつなんですか？」

そう聞く右手を腰にあて二条は笑いながら

「あつは あたしのランクはBランクだよ」

つと胸を張っていつてきた

「魔法ランク」

とはSランクからFランクの7段階で決められ、この世界でもSランクの魔道師は10人しかいないこの10人は「大魔道師^{だいまどうし}」と呼ばれている。主にこの世界を動かしている人間がこの10人である。

「Aランク魔道師」

このAランク魔道師でも100人程しかない。その殆どが魔法騎士^{まほうきし}である。

魔法騎士^{まほうきし}「魔法騎士」

とは魔法が使える警察みたいな者である。ちなみにこの「魔法騎士」に席を置くには

かなりの至難であり超エリートでも必ず入れるものではない。

「Bランク」

だからこのBランクでも世間一般ではエリートなのである。

Fランクとはその中でも1番下なので使える魔法の種類も一般人のそれとほぼ変わらない

位である。この学校では最低でも卒業までにはCランク魔道師になれる様に教育が行われる。

「あ、志木野君教室ここだよ。」

どうやらここが教室らしい。廊下の一番端の教室に1・4と書かれたプレート
そして、

「春樹の運命を大きくかえる事になる者達に出会う。」

初登校そして出会い2（後書き）

今回は少し短いです・・・

初登校そして出会い3

「先生、あの子が入試の時の模擬戦闘でアレックス先生を倒した子ですか？」

中年で眼鏡を掛けた教師が職員室でマイカップでコーヒーを飲みながら角刈り体育教師にそう尋ねた。

ちなみにこのアレックスと言う教師だが学生時代ボクシングの選手だったらしい。

「ええ、そうらしいですね。私はその場に居なかったんですが、教官をしていた二条先生が

言ってたんですが、凄かったらしいですよ。」

角刈り体育教師が二カーと笑いながら答え

「あのアレックス先生を一発で倒したんですよ。私も一度戦ってみたいですよ。」

と角刈り体育教師が言うと

「いや、いや先生が戦っちゃ駄目でしょ。けが人がでちゃいますよ」と、中年眼鏡教師は笑いながら答え

「まあ、そうですね。あっはは」

角刈り教師と中年眼鏡教師の笑い声が職員室に響いた。

「おーい、じゃあみんなー席に着いて授業始めるよー」

担任の二条未来^{にじこうみ}は手に持っていた教科書を手でポンポン叩きながら教室のちよつど

真ん中にある教壇の前に立つとそれまで自分の席から離れていた生徒達が

「はい」

といいながらそれぞれの席に戻って行き全員自分の席に着くと担任の二条未来が

「授業始める前に皆にお知らせあるよー」

二条未来が笑顔で生徒達に言うとは一番後ろの席座る短髪の生徒藤峰蓮司が

「この授業前の発表ゆうたら・・・まさか未来ちゃん転校生かー？」

関西弁で短髪の藤峰蓮司が生徒が立ち上がり嬉しそうに聞くと

担任の二条未来は胸の前で腕をクロスにさせて

「はい残念。転校生じゃ無いよ。」

と答えると、関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司が少し残念そうに

「なんやーちゃうんかいなーじゃあ未来ちゃんお知らせっていつ

たいなんなん？」

はっ まさか抜き打ちテストや無いやろうな？

そんなんホンマにアカンでテストなんかされたら俺絶対赤点やわー」

関西弁短髪男子生徒は少し青ざめた顔で担任二条未来に聞いてみると

「蓮司うるさいよ。全く話が前に進まないじゃん。」

担任二条未来は呆れた顔で関西弁短髪男子生徒藤峰蓮司に指摘する。

「ゴメン、ゴメン。で、未来ちゃんお知らせっていつたいなんなん？」

関西弁短髪男子生徒不思議そうな顔で二条未来に聞いてみる。

「えーと入学式の時からずーと空いていた席があるでしょ。ちょ

うど蓮司の前の

席今日からその席の子が来るから。」

二条未来は少し疲れた顔でクラス全員に伝える。するとまた関西

弁短髪男子生徒

藤峰蓮司は騒ぎだし

「ホンマか！！ずーっと前の席空いottaからめっちゃゆ気になっ

とてん。

え？まさか女の子かいな」

などと騒いでいると藤峰蓮司の生徒の隣の席の女生徒が立ち上がり「ちよつと！　蓮司少し黙って！　話が前に進まないじゃない。」

隣の席に座る女生徒ポニーテールで髪の色は少し淡い茶色長谷川美羽は

隣の席に座る藤崎蓮司に指摘し

「おゝ恐まじ美羽は俺の所のオカンより恐いで」

などと言うと他の生徒達がクスクスと笑いそんな事を言われた本人は顔を真っ赤に染め

「蓮司！アンタあとで覚えておきなさいよ！！」

と言い頬を膨らまし長谷川美羽は席に着きそれを観ていた二条未来は笑いながら

「うん　やっぱりいつ観てもあんた達二人の夫婦漫才は面白いよね。」

などと言うとクラスでどつと笑いがおきそんな事を言われた二人はかなり恥ずかしそうにし

「　先生！何で私がこんな奴と夫婦なんですか！」

長谷川美羽顔を真っ赤にし立ち上がり大声で言い

「そや、そや俺ももつとおしとやかな子がタイプや」

藤峰蓮司も立ち上がり反論する。

「ゴメン、ゴメン謝るから席に着いて。」

そう二条未来が言うのと藤峰蓮司と長谷川美羽はしぶしぶ席に着いた。

「じゃあ、話がかかなりそれちゃったけど話戻すね。」

二条未来がそう言うのと廊下で待っている春樹に

「じゃあ志木野君入ってきて。」

そう二条未来に言われると廊下でかなりの時間を待たされた春樹は（やつとかよ。　あまりにも話が進まないから忘れられてるのかと思っただ。）

そんなことを考えながら春樹は教室のちょうど真ん中にある教壇の

傍に行き

担任の二条未来の横に立つ。

「じゃあ志木野君、自己紹介よろしく。」

担任の二条未来そう言いながら黒板に春樹の名前を書き少し横にずれ春樹は

教壇の前に立ち

「えーと志木野春樹しきのはるあです。入学の手続きでちょっと

登校するのが遅くなりましたが。今日からよろしくお願いします。

」

春樹は「ペッコ」と頭を少し下げ自分の紹介を行った。

「志木野君は海外暮らしが長くて日本に帰ってくるのも十年振りらしいから

みんな仲良くしてあげてね。」

担任の二条未来があまりにも少ない春樹の自己紹介に付けたしそう言い

「じゃあ志木野君の席は真ん中の一番後ろの席の前の席ね。」

担任の二条未来にそう言われ春樹は指示さらた席に着き持っていたかばん

を机の横に掛けた。席に着くとすぐに後ろに座る生徒から

「今日からよろしくな。俺は藤峰蓮司ふじみねれんじや普通に

蓮司て呼んでくれ。俺もお前の事春樹て呼ぶさかい。」

と言われた春樹は

「わかった よろしく蓮司れんじ。」

春樹はふつと自分の横の席を見ると空席だったので

「一つ聞いていいかな」

と後ろの席に座る蓮司に聞くと

「ええで。どないしたん？」

と蓮司が答えたので

「俺の隣の席の子は今日は休みなのか？」

春樹がそう蓮司に質問してみると

「いやー悪い 俺ちよつと分からへんわ」

蓮司は少し気まずそうに答えたので春樹が不思議そうにしていると蓮司の隣の席に座るポニーテールの少女が

「私は長谷川美羽。はせがえわみう 気軽に美羽みうて呼んでね。」

春樹君つて海外から来たんだよね 何処の国からきたの？」

自己紹介をした長谷川美羽は目をキラキラさせ帰国少女春樹に質問してきた

（うーん・・・どうやって答えようかな）

と考えていると

「こらーそこお」

担任の二条未来が人差し指をビッシと春樹達の方へ向け

「その聞きたい気持ちも分かるけど、もう授業始めるからそうゆう質問タイムは授業終わってからにしてね。」

担任の二条未来がそう長谷川美羽に言うとき少し残念そうにし机に置いてある

魔法学の教科書に視線を戻す。 それを確認した二条未来は自分の手元にある魔法学の教科書

を開き

「じゃあ昨日の続きの16ページからやるね」

と担任の二条未来が言うときクラス中の生徒達も言われたページを開き教科書に目を通していき

春樹も言われたページを開き目を通していくが

（結構難しいな、俺こういう理論の話はよく分からないな）

など考えているとき突然教室の前の扉が開き担任の二条未来が

「もう授業始まってよ。早く席に着いて」

と言うとき遅刻してきた生徒は

「ごめんなさい。」

と言い自分の席に向かう。春樹は目を通していた教科書から横目で隣の席を見ると

（他の席は全部埋まっていたから・・・あゝ隣の席の奴か）

と考えこちらに向かって来る生徒の方を見ると生徒は長い黒髪に二重瞼で凄く

綺麗で大和撫子ふゆのゆきねと言う言葉が凄く似合う少女

「冬野雪音ふゆのゆきねだった」

初登校そして出会い4

春樹の横の席の生徒は今朝登校中に会った冬野雪音^{ふゆのゆきね}だった。

春樹は自分の席の隣の席に座った冬野雪音に小さな声で

「今朝はどうも。一緒のクラスだったんだな。」

と言うと自分の席に座り魔法学の教科書を読みながら小さく頷いた。春樹はこれ以上喋ってまた担任の二条未来^{にじようみらい}にこれ以上怒られるのも嫌だったので自分の魔法学の教科書を読みながら

（彼女が入ってきた瞬間クラスの空気がちよつと変わったな）

春樹が教室を見渡すと少し気まずそうにしているが全員担任の二条未来の話を

聞きながら教科書を見ている者やノートに今聞いた話を書いている者春樹後ろの席

に座る藤峰蓮司^{ふじみねれんじ}、長谷川美羽^{はせがわみづ}の二人

も担任の二条未来が話す内容に耳を傾けながら教科書にも目を落とす。

春樹の自分の教科書に目を通すが春樹はこういう理論の話は得意では無かったので

若干ウトウトとしながら

（あゝこういう理論の話は俺じゃなくて秋人^{あきひと}の得意分野だからな）とか考えていると眠気の誘惑には勝てず春樹の意識が教科書から離れ意識が飛んだ。

「おい、被験体^{ひけんたい}24号」

暗い通路を歩いていると後ろからそう声を掛けられ

「……………おいお前、俺をその番号で呼ぶな。俺には春樹って言う名前がある。」

春樹が立ち止まり振り向かず声を掛けてきた男に言い返すと

「あゝわりいわりい被験体24号のは・る・き君」

その白衣を着た男はニヤニヤ笑いながら春樹を馬鹿にしながら言うてくる。

春樹は目力だけで人を殺せるような目でその男を睨みつけ

「…………お前…………口の利き方には注意しろよ…………それ以上言うと俺も、あいつ等も黙っちゃいない。」

春樹が男にそう言うのと春樹の事を馬鹿にしていた男が一步後ろに下がり

「おおゝこええ、こええ、そんな怒んなよただの冗談だよ。」

春樹が無視して行こうと思った瞬間に男が

「お前さんここから出て行くらしいな。良かったな外の世界だぜ。」

└

男がニヤニヤして言うとき春樹は

「…………どの道またここに帰って来るんだ全然良くは無い。」

春樹がそう答えると

「まあ、そりゃそうかお前さんの帰れる場所はここしか無いからな。」

└

男が笑いながらそう言うとき

「聞く話によるとかなり難しい任務らしいじゃねーか　まあ死なない程度に頑張りな。」

男が笑いながら暗い通路の奥へと消えていった。

「……………当たり前だ。こんな事で死んでたまるか…………俺達は生きて

このクソみたいな所から出て行く。　そのためにも俺はあいつを……………

「こらー志木野春樹ー」

春樹はふつと目を覚まし声の発信源の方を見ると笑顔で俺の方を見ている担任の二条未来が居た。

「君ねー私の授業で居眠りするとは度胸あるね。」

担任の二条未来がこれでもかという笑顔で春樹の席の方へと歩いてくる。

だがその瞬間に一時間目の終了の合図のチャイムが鳴り響き担任二条未来は

少し残念そうに

「春樹、次居眠りしたら教育指導だからね」

担任の二条未来はその一言を残して職員室へと帰っていった。

（教育指導てただの暴力だろ てか志木野君からいつのまにか呼び捨てになってるし。）

春樹は深いため息をつくと後ろの席の蓮司が笑いを堪えるように

「春樹お前エライ怒られたな。」

蓮司は笑いを堪えられなかったようでゲラゲラと笑っている。

「俺初めて見たで未来ちゃんの授業で寝てるやつ ほんま凄い度胸やで。」

蓮司がそう言うとなりの席の長谷川美羽も

「ほんとだよ。 春樹君二条先生あ見えても凄く怖いんだよ。

他のクラスの子が言ってたんだけど校内で禁止されてる魔法使つての喧嘩をしたらしいんだけどそれを見つけた二条先生が鬼の形相で走っていった

魔法使わず体術だけで喧嘩してた2人を止めたって噂もあるから春

樹君も気よつけた

方がいいよ。」

そう長谷川美羽が言つと春樹は

「そりや怖いな これからは気よつけるよ。」

そんな会話を三人で行つてしていると春樹の席の前にクラスの生徒達が集まつてきて

各々の自己紹介をしだした。

「私^{ゆみ}夕美宜しく 夕美ちゃんて呼んでね

とか

「志木野君つて外国から来たんだよね何処の国から来たの？」

とか

「志木野君つて彼女とか居るの？」

とかそれぞれに春樹に言つてくる

「ちよつと待つてそんなに一斉に言われても答えられないから」

春樹は少し困つた顔をしているといいタイミングで次の授業のチャイムが

なり響いて春樹の席の前にいた生徒も少し残念そうにそれぞれの席へと戻つて

行き春樹は心の中で一つため息をつきふつと隣の席を見ると一時限目の授業が

終わつていつのまにか居なくなつていた冬野雪音もいつのまにか歸つてきていた。

この学校では通常の授業も行われる。その内容は普通の高校生が習うのと同じだが

この学校は一応超が付くほどの優秀校だから内容もかなり難しくこゝういう勉強があまり

得意ではない春樹は二時限目から四時限目の通常授業に頭を悩ました。

ようやく四時限目の終了のチャイムがなり春樹は自分の髪の毛をく

しゃくしゃとし

（まさか授業がこんなにも難しいなんて テストの時どうしようかな・・・）

とか考えていると後ろの席に座る蓮司が

「春樹、昼飯どうするんや？」

と春樹に尋ねると

「いやまだ何も考えていないな。」

そう言うのと蓮司が

「じゃ一緒に食堂へ飯いこか。」

春樹は少し考え

「そうだな。」

と言い席から立ち上がり教室から出た。

食堂までは教室からすぐに付き扉を開けると結構混んでいて

「結構混んでんな」 どつか席空いてへんかな」

と二人で食堂内を歩いていると

「蓮司」

と声を掛けられ二人で振り返るとそこには金髪の生徒が手を上げている

「おおロイヤンか ちょっと何処も席空いてへんから席合い席でもかまわへんか？」

と尋ねると

「ああいいよ。」

と言うと机の上に置いてあった荷物を片付けその間に春樹と蓮司は食事を買いに行き

金髪生徒の所に戻ってくると机は片付けられていたが春樹達を待っている人数が増えていた

春樹が机に着くと

「ゴメンね春樹君何処も席空いてなかったから合い席させてもらっね。」

長谷川美羽はそう言うのと胸の前で手を合わせて言うてきたので

「全然大丈夫だよ長谷川 俺達も合い席させてもらってるから」
春樹がそう言うのと長谷川美羽が少し膨れ面で

「美羽」

と一言いい

「朝言ったでしょ 美羽て呼んでって」

そう春樹に言うのと

「あゝゴメンエーと み、美羽」

春樹が少し恥ずかしそうに言うのと美羽は嬉しそうに

「うん よろしい」

そんなやり取りをしていると春樹の前に座る金髪生徒が

「俺は岡崎ロイ。 春樹宜しく。」

春樹は一つ疑問に思ったので

「日本人じゃないのか？」

と、尋ねてみると笑いながら

「ああ俺アメリカ人とのクォータなんだ。 まあ顔は殆ど日本人で

髪の色だけ受けついたらんだ」

春樹は納得した顔で

「なるほど分かった じゃあこれからよろしくなロイ」

とロイの前に右手を差し出した。それを見ていた蓮司が

「良かったな春樹これで友達三人目やで じゃあそろそろ飯でも食べようや」

蓮司が今日の昼御飯のカツ丼を食べようお箸を持った瞬間

「ちよっと！お待ちなさい！」

同じ席に座っていた少女が突然立ちあがった少女はとても綺麗な金髪で

縦ロール白人特有の綺麗なブルーの瞳少女

「わたくしまだ自己紹介が終わっていませんわ」

と、お昼のカツ丼を食べようとしていた蓮司にびしっと一指し指を向け

「わたくしの自己紹介が終わるまで食事はお待ちなさい」

と、言い蓮司は不思議そうに

「なんやレイラお前まだ自己紹介してへんかったんか。えーと春樹こいつはレイラや 良し自己紹介も終わったし飯にしようか。」

蓮司は再び自分の井に手をかけ食べようとしたので

「なんでそんな適当な自己紹介なんですよ！」

と少女が怒りながら蓮司言うつと

「いやあでもはよ食べな御飯固なつてまうで。」

と蓮司が言つので少女は

「はーもついいですわ 先に食べてくださいな。」

と蓮司に言うつと

「じゃ先に食べさせて貰うわ。」

と自分の井に入っているカツ丼を食べだした。

春樹、美羽、ロイは完全に食べるタイミングを無くし少女が自己紹介を始めるの待っている。と蓮司の方を見ていた少女がこちらに振り返り右手を腰に当て

「わたくしレイラ・ハーゲンボルトですわ。 イギリスの貴族ハーゲンボルト家の次期当主ですわ。」

と、自身たつぷりに自己紹介を行ってきた。すると横で一人

お昼を食べていた蓮司が食べるのを止め

「なあレイラお前がようゆうとるハーゲンボルト家って言うのは一体なんなんや？」

と言うつと春樹、美羽、ロイの三人は呆れて

「あんだ、本当に知らないの？」

と美羽が呆れて聞き

「蓮司僕でもハーゲンボルト家は知ってるよ」

とロイも呆れ

「そんなん言われても知らんもんは知らんからな。 春樹お前は知ってるんか？」

と春樹に尋ねると

「当たり前だ。 勉強が出来ない俺でもそれくらいは知ってる。」

春樹も呆れて言う

「まじか皆知つとるんか・・・」

と、少し寂しそうに答え

「それでハーゲンボルト家っていうんは何や？」

と、蓮司が言うときレイラは少し嬉しそうにし説明しようとした瞬間
春樹が

「ハーゲンボルト家っていうのはイギリスの五大貴族の一家だよ。」

春樹が答えると前に座っていたレイラが

「なぜあなが説明するんですか。」

と、ちよつと怒りながら言っているが春樹はさらりと流し話えお続
ける。

「イギリスの女王エリザベスを守る五枚の盾、ハーゲンボルト家は
その中

の一家だよ。」

と、説明するとレイラも納得したかのようにうんうんと首を頷いて
いる。

「と、言うことはレイラお前貴族やったんか！」

蓮司はカツ丼を食べる事も忘れてびっくりしているようだ。

「そうですわ。 わたくしは絶対にこの学校を卒業して女王陛下を
守れる

様な強い騎士になります。それがわたくしの夢ですわ。」

と、レイラは満面の笑みを浮かべ春樹達に語った。

「じゃあ俺も自己紹介しとか 俺の名前は志木野春樹だレイラよ
ろしくな。」

春樹が笑顔でレイラに言うときレイラは少し恥ずかしそうにし

「こちらこそよろしく願いますわ。」

それをみていた美羽が

「良かったねレイラ春樹君と友達になれて。」

と、言い

「レイラ休み時間とかもずっと春樹君の喋りたそうだったもんね。」

と、言うときレイラは顔を真っ赤にして

「み、み、美羽なんて事をいってますの　そ、そ、そんなわけありませんわ。」

と、言うとき美羽はくくと笑い

「あれーそうだったけ」

と二人でやりとりをしているの横目に春樹とロイは完全に伸びたラーメンを

食べる。すると予鈴のチャイムが食堂に鳴り響き他の生徒達も教室へと戻って

行くので春樹達も教室に戻るため自分達が座っていた机の上を片付け教室に

戻ろうと思ったとき春樹がふっと思い出し

「そういえば日本にも魔術師の有名な一族があったよな。」

と、言うとき

「いや俺は知らんわ。　じゃあ急ぐから先行くわ」

と蓮司、美羽、ロイは先に教室に戻っていった。残された春樹とレイラは

不思議そうに顔を合わせ少し考えたあとで教室に戻って行った。

初登校そして出会い4（後書き）

今回は少し長めになります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4099z/>

魔法世界と高校生

2011年12月19日22時59分発行